



Title	ハイデガーの学問批判について
Author(s)	中橋, 誠
Citation	メタフュシカ. 1999, 30, p. 113-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66622
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハイデガーの学問批判について

中 橋 誠

未知のものに対するあこがれや不安に駆られて、それが何であるかを見極めたいという欲求は誰しも、多かれ少なかれ持つてゐるものであろう。アリストテレスも『形而上学』の冒頭で「すべての人間は、生まれつき、知ることを欲する」(Metaph.

AI, 98a)と述べている。ここでアリストテレスは、感覚を通じた刺激をも知への欲求の一つに挙げているが、感覚を通じて得られた知は普遍性からほど遠いものであるがゆえに、普遍性を目指すには学問的認識、しかも理論的な学問的認識を目指す必要があると主張する。この主張は、現在のわれわれの常識とも合致する。われわれはなにについて知を得ようとするとき、その対象を所与の状態に放置することなく、先人に教えを請うたり、また自らあれこれの検討を加えることで、その知を理論的に限定・確定していく。このとき、われわれはすでに無反省的な立場を脱しあじめていると言えよう。この延長線上に厳密な思惟たる学問的思惟が存すると通常考えられている。この学問

的思惟の不可欠性については言及するまでもあるまい。われわれは日常生活においてすでに、学問的思惟を通じて得られたさまざまな成果を享受し、それなしにはもはや生きていけないほどである。

しかし、以上のよつたな常識的な見解に対しても、ハイデガーは、「学問 (Wissenschaft)⁽²⁾ は思惟しない」(WD, 4, 57, 154, 155, VA, 133)と主張する思素者がいる。ハイデガーである。これは何を意味しているのか。思惟しない学問は何を遂行しているのか。思惟こそが学問の本分ではないのか。しかも、ハイデガーが「学問」で考へているのは、古代ギリシアの *επιστήμη* や中世の *doctorina, scientia* とは区別された、近代そして現代の学問である (Vgl. HW, 74, VA, 46f.)。近現代の学問の、それ以前の学問に対する成果の著しさを考えると、近現代の学問の思惟こそがもつとも深いものなのではないか。ことじとく常識に反する発言をあえてなすハイデガーは、「学問は思惟しない」という命題

で何をわれわれに訴えようとしていたのか。

ハイデガーによる学問批判は、言及されることが少ないものの、その生涯にわたるものである。またそもそも、現在われわれが全集版に目にすることができるハイデガーの最初の講義自体が学問批判で始まっている（一九一九年）。しかし、批判といつてもそれは、ハイデガーがおのれの「哲学の規定（Bestimmung）のために」（GA56/57）必要としたものであり、学問の拒絶・廃絶を目的としたものではない。「存在と時間」（一九二七年）においても事態は変わらない。『存在と時間』でハイデガーの思惟以外のあり方をする思惟として「実証的」という形容のもとに一括される学問は、存在論的な基礎を前提しているながらそれを見逃しているという点に関しては批判の俎上にのせられているものの、それによって「拒否されたり否定的な判断が下されているわけでは決してなく」（SZ50⁽³⁾）、ここで実証的学問が引き合いに出されるのは、その言及がなされる節（第十節）の名称から明らかのように、「〈実証的学問である〉人間学・心理学・生物学に対する〈ハイデガーの思惟である〉現存在分析の限定」（SZ45）を目的とするものなのである。事態がこのよくなものであれば、ハイデガーによる学問把握を明瞭にし、その学問批判を検討することは、ハイデガーがおのれの思惟をどのように捉えていたかを探るための恰好の機会となるのではないか。そしてそれは同時に、普段われわれがそれに携わ

つていながら、それほど関心を向けず自明視している「学問」を再検討のための機会をも与えてくれるであろう。⁽⁴⁾

一

ハイデガーによる学問批判を、まずはその初期の思惟において確認したい。一九一九年の講義においてハイデガーは学問をすでに、それ以降と同様、「個別的なもの」として捉えている。⁽⁵⁾ それは、学問が学問一般としてではなく、おのおの固有の探求領域を有するような個別の学問——たとえば法学や地学など——としてのみ成立していることを指している。学問が個別的なものとして多様なあり方をしている理由は、各学問を支える理論の多様性に求められる。理論は事象への接近通路を確保する観点、それゆえ学問にその探求領域を与え、そのうちで対象・客觀とされるはずのものを決定し、概念把握を可能にする学問の基盤である。この理論が一つのものには限定されざるままに考えられるがゆえに、学問も多様なあり方をせざるを得ないのである。各学問はそれぞれ固有の理論を通じてのみ、それぞれの真理を獲得している。それゆえ、学問を支える理論的態度は、いかなるものであれ理論に先立つ真理、理論に先立つ対象を許容せず、理論に先立つ第一義的な所与を、いまだなんらの秩序を持たない感覚データ（Empfindungsdaten）としての

み受けとつてゐる。この理論的態度における対象認識、つまり感覚データ（感覚の多様）と理論（概念）との総合により成立する対象認識という考えは、カントの思惟にその源泉が求められるような、現在のわれわれにとりても違和感のないものである。しかしこれに対してハイデガーはある疑念を表明する。それは、わざわざ理論的態度をとらずともそれに先立ちすでにたとえば机を机として、鉛筆を鉛筆として、つまりなにかを一定の意義において受け取つていて、つまり、意義として与えられる一定の秩序のうちに生きているわれわれは、「どのようなものであれ事象把握という知的迂路を経ずともわたしに直接与えられている」「意義的なもの（das Bedeutsame）」をこそ「第一主義的なもの」（GA56/57,73）として堅持するべきではないかといふものである。いからハイデガーは、意義的なものの体験を理論的態度に先立つものと考え、意義的なものの体験の破壊・歪曲としてのみ理論的態度を解するようになる（Vgl. GA56/57,85,89, GA61,86,90）。こうしてハイデガーは、理論的態度から、その歪曲・制限を逃れた根本的態度、意義的なものの体験に立ち返ることをおのれの課題とし、この還帰を「現象学的な生」（GA56/57,110）と名づけている。ハイデガーのこの主張に対しては、しかしながら、もし意義が与えられ、それが言葉で表現されうるのであれば、そのときにはすでに一定の理論に基づく客觀化が働いているのではないかという反論が理論的

立場から予想される。これに對してハイデガーは、「言葉がすべてそれだけですぐに客觀化している」という考え方。人が意義のうちで生きているなら、当然、意義されたものを理論的に考えられたものとして把握しなければならない」という考え方。意義の充実は即座に対象を付与するものでしかない」という考え方」は偏見だと断じ、これは、「意義機能の一般化・普遍性性格が、類概念の理論的・概念的普遍性と同一である」という思い込み」と結合したものだと論じる（GA56/57,111）。この記述では説明が不十分な上、一九一九年の講義ではこれ以外に、この点に関する記述は見あたらないが、一九六四年にほぼ同一の問題が再び取り上げられ具体的な説明がなされている。そこでは、「あらゆる思惟が表象として、あらゆる発話も口外としてすでに『客觀化してくる』」（GA9,71）という通常の信念に對して、薔薇の観賞（GA9,73, Vgl. SG,71ff.）、病人にかける慰め・励ましの言葉（GA9,74）の例が挙げられ、発話によりなんらかの意義が与えられていても、それは必ずしも客觀化・理論化を伴う必要のないことが指摘されている。⁽⁶⁾

いへしてハイデガーは、理論的態度に先立ち、しかしそれでいて一定の秩序が与えられている、意義的なものの体験への還帰をおのれの課題とするのである。しかしあれわれはなにかについて考察をしようとしたときには、さしあたってすでに理論的態度に陥つてしまつてゐる。それゆえ意義的なものへの還帰

は必然的じ、理論的態度の「解体」(Destruktion) へして遂行されるるいふじなむ (Vgl. GA59,185)。」の解体を通じてわれわれは、「先立つての把握 (Vorgriff)」を導かれて、理論的態度に先立つ「哲學的な根本経験」(GA59,35) へもたらされるゝ考えられている。それが可能な理由は、解体が、われわれが理論的態度に先立つてそのうちにいたはずの「歴史的な具体態」にある事実的な生活経験・生活世界に関わつてゐる」(GA59,181) (強調は引用者)」とに求められる。やつするに、」の解体によつて指される意義的なものの体験とは、後にやはり同じく「ゆひしの最も近い具体態」(SZ,252) へ表現される「日常性」(Alltäglichkeit) に等しきものだと考へられる。」の推測は唐突に感じられるかもしれないが、ハイデガー自身、一九二九／一〇年冬学期の講義で次のように述べてゐる。

「重要なのは特殊な態度をいいふのではない、逆に、意識や体験など的心理学的またはその他の理論から逃れ、日常的で自由なまゝなる」におけるそれを悉ねるゝ」 (Gelassenheit) である」 (GA29/30,137)

「」かい、『存在と時間』(一九二七年)において日常性が探求の着手点とされた理由も明瞭となつた。」で日常性は、「」おたつてそして大抵 (zunächst und zumeist) のあり方」と

かれているが、それは、理論的態度に先立ちその制約を逃れた根本的態度といふ意味においてなのである。それゆえ、日常性において、」も「任意で偶然の構造ではなく、…」貫して保持されている本質的な構造」(SZ,16f.) (強調は引用者) が解明可能とされねばならぬとハイデガーは考えたのである。

二

以上のよつたな過程を経て、ハイデガーはその思惟の前期において日常性を探求の着手点として、理論的態度の成立由来を」に求めるようになむ (Vgl. SZ,351,356)。日常性から理論的態度への移行は、あれこれのものに關わる実践的態度から、それを逃れた、客観的諸事実の觀察への移行であると通常考えられてゐる。しかし、理論的態度をも、その關わるべき対象が必要とされるという意味で、実践的態度の一ひとこじ捉え、そして、先で触れたように、客観に対する理論的態度の先行性を認めるハイデガーは、」のよつたな通常の見解には与しない。日常性から理諭的態度への移行としてハイデガーが唱えるのは「決意性」(Entschlossenheit) のみである (SZ,363)⁽¹⁾。決意性においては、

ハイデガーが「投企 (構想)」(Entwurf) と術語化する、一定の理諭の選択がなされる。投企は、事象がどのよつたなあり方をしてゐるか——たゞえば経済学的なあり方や歴史学的なあり方

など——をあらかじめ定め、それを通して、それに適した概念性、対象となるべきもの、探求領域を画定する (Vgl. GA25,32)。

この過程を経て、対象は「純粹な發見『に對して投企』され、すなわち、客觀となる」 (SZ,363) といふが期待される。いへして学問は、もんもん真理を追究しておのれの対象の發見につとめる性質を有していくがゆえに、ひたすら対象の「被發見性のみを予期する」 (SZ,363) ようになり、日常性で妥当していくような実践的態度は身を潜め。

この、日常性から理論的態度への移行は、われわれが日常的なものの見方から解放される過程、われわれが日常的に与えられていた意義的なものを超越していく過程である (SZ,363)。そして、そのやうには、事象のあり方の新たな投企（構想）が必要されるといつゝとから、日常性においてすでに所与のものとされている意義的なもののあり方、つまり日常性において見逃されていた、その意義的なものの存在体制・存在が問題とされているところがわかる。やつすると、理論的態度への移行、すなわち学問の成立においては、ハイデガーの考へる哲学——存在者の存在に関わるゆくしての哲学 (Vgl. GA22,7, GA61,60)——が必要といわれてよいことになる。それも、ハイデガーは、「学問はすぐして、潜在的にそして根本においては哲学である」 (GA25,38) とする張り (Vgl. GA9,244, GA29/30,33)。この、哲學を学問の根本つまつ原学問 (Urwissenschaft) とする

把握⁽⁸⁾は、具体的に何を意味するのであるか。次の引用を見てみよべ。

「形而上学に基いて現実存在していくべきのみ、学問はその本質的な課題をつねに新たに獲得する」とがである。この課題は、知識の収集と秩序づけに存するのではなく、自然と歴史との真理の領域全体をつねに新たに開示するといふに存する」 (GA9,121)

この引用では、一般学問の課題として考えられる「知識の収集と秩序づけ」ではなく、「自然と歴史との真理の領域全体をつねに新たに開示する」が、「形而上学（＝哲学）」に基いて現実存在している「学問」つまり原学問としての哲学の課題として考えられてくる。つまり、哲学が原学問とされていくのは、哲学が「領域」を「新たに開示する」もの、すなわち、学問の個別的領域を開拓・創造するものとして考えられているためである。この哲学把握は、学問領域の解体として捉えられた初期の哲学把握と矛盾してくるように一見思われる。しかし、一般学問が一定の領域にとどまる、つまり一定の領域に囚われたものでしかないのに対し、ハイデガーの考える哲学は、領域の解体・創造のいずれにせよ、既存の領域に囚われる」となく、既存の領域を超越するところに關しては一貫している。

学問のいわゆるがなの規定、「個別的なもの」という規定がなされたのも、そつするも既存の個別的領域を超越し、その意味で「全体的なもの」⁽²⁾に関わるものとして目指された哲学的思惟との対照においてであると考えられる。ハイデガーがおれの哲学的思惟に求めたこの方向は生涯を通じて一貫している。たゞいえば、一般学問の重視する理性・認識ではなく、「気分」(Stimmung)が重視された理由がここに求められる。理性・認識を方法とする一般学問が、存在者の一定の領域のみを探求対象とするを得ず——そのため「領域存在論」とも言われる(GA25,36)——、個別的学問となるべくを得なかつたのに対し、気分を方法とする思惟ならば、「存在者の特別な領域をいまだ意味しない」(GA9,189)「全体としての存在者(Seiendes im Ganzen)」(GA9,110,113,189f., GA55,206)への接近が可能にならざるを得ない。

この、全体としての存在者へと開かれ、既存の個別的領域からの超越を試みると、ハイデガーの哲学的思惟は、単に既存の個別的領域から逃れるだけではなく、新たな個別的領域を切り開くという面に次第にその力点が置かれるようになる。そしてこの考えは、一九二二年の講演『ドイツ大学の自己主張』において一つの絶頂を迎える。この講演では、哲学としての学問（つまり原学問）(SU,11)が「全体としての存在者であるがままの存在者として問いかけ、概念把握するべ

り」と、「ドイツ民族の精神世界」が「ついに新たに闘い取」(SU,15)られ、「民族的・国家的現存在」が「尊か」(SU,16)されねばならないと主張されている。原学問は、個別的な学問領域じるか、それらをすべて包括する、ドイツ民族の精神世界を切り開く役割を期待されるにいたつている。

三

原学問としての哲学に上記の役割が期待されるにあたつては、ハイデガーがもともと堅持していた姿勢にある変更が加えられている。ハイデガーにおいて哲学（原学問）は、一九一九年以來、一つの全体つまり「全体としての存在者」を目指すものとして捉えられていた。それゆえそれを通じて、既存の個別的領域に囚われることなく、新たな（とくに学問の）個別的領域を切り開くことがその目的とされ得たのである。しかし『ドイツ大学の自己主張』に見られるように、個別的領域ではなく、それをすべて包括するよつた「世界」つまり「全体としての存在者」(GA9,143,145, GA69,19, HW,87)がそれ自身切り開かれるために、目指されるべきものとされるなるべく、そこでは、今まで原理的に区別されてきた、「全体」と「個別」との差違が無視されてしまつている。「全体」は無限定なるがゆえに、「個別」つまり被限定態の基盤として働き得たのに、もし創造されるべ

あるの、つまり一定の秩序を有するべきものとして捉えられるなら、すでに限定を被つたものとして考えられていることになります。

この点に関する曖昧さは、一九一九年の講義にすでにその萌芽が見られる。そこにおいて挙げられていた、個別的学問・理論的態度の還帰すべき先としての意義的なものの体験は、それが一定の秩序を有するものとして考えられたとき、被限定態の源泉としてそれ自身は無限定なものでなくではないというあり方をすでに放棄してしまっている。われわれのあり方が被限定態としてしかり得ないといった点をハイデガーが見逃していたわけではない。しかし、その思惟の初期において、ハイデガーによつて、解体されるべき被限定態として挙げられていたものは、まずは、先に見られたように理論的態度（一九一九年）、次には「伝統」（Tradition）（一九一九年／二一年）（GA9,34）であつて、意義的なもの・日常性はそれに先立つ、いまだ無限定なものとして捉えられている。日常性が伝統と等しいものされ、解体されるべきものとなるのは、管見の限り、一九一四年になつてからである（Vgl. BZ,14）。しかし、本論第一節の引用（GA29/30,137）にも見られたように、その後も、日常性が「全体としての存在者」として捉えられる箇所もあり、日常性と学問との関係には揺れが見られる。

日常性と学問との関係が画定されるのは、ハイデガーの思惟

が確定されるのに対応している。存在の問いというハイデガーノの哲学的課題と一般学問との境界は、存在者の存在体制・存在へ目を向けるか否かに求められる。この点において、存在を見逃し、存在者にのみ関わっている学問的態度には日常性との間に差違が認められず、日常性から学問的態度への移行は無媒介になされるものと考えられる（Vgl. FD,1）。まさにハイデガーは、一九二六年以降、一般学問を「実証的学問」・「実証主義」という名称のもとに一括する⁽¹⁴⁾が、「実証的学問」・「実証主義」の態度も、上記の点において、日常性におけるものと変わらないとして、実証主義を「素人」（GA26,200）と併称する⁽¹⁵⁾といえする。そして、このように、日常性と学問的態度とが同一視されるにつれ、学問的態度において対象となる存在者の現出を可能にするものとして考えられていた投企は——投企という術語自体は次第に放棄されるものの——日常性の成立においても働いているものと考えられるようになる。日常性において学問的理論に相当するものは先入観（伝統）としてわれわれに与えられているが、これはわれわれに先立つて過去になされた投企による与えられたものだと考えられている（Vgl. FD,32,HW,81）。おのれは、投企により与えられた先入観に囚われてはいないと主張する人がいるかも知れないが、このような主張がなされるときこそ、先入観はもともと強くその人を支配しているのであり、その先入観、そしてその投企が問題とされうると考えられ

る (FD,30,37)。

理論的態度・学問と同一の構造により成立していると考へられるにいたつた日常性は投企により、しかも、妥当領域を広げた投企により超越せらるるもの、新たな世界の投企により変革されつるゆのとして把握される (Vgl. EM,47f)。『ドイツ大学の自己主張』(一九三二年) は「の把握に基いて成立している。しかし、ハイデガーは一九四五年に当時の「」を振り返って、「学問はもはや革新の試みとしては規定不可能」 (SU,39) である」とがその後明瞭となつたと述べてゐる。これは、ハイデガーノの、フライブルク大学総長としての大学改革の挫折にその原因を求めることが可能であるが、ハイデガーノの中期以降の思惟をたどると、ハイデガーノの思惟がより徹底化された帰結として考えられる。それを以下に見てこよう。

ハイデガーノはその中期以降の思惟におこり、おのれの思惟と学問との基本的把握を一新するわけではないが、おのれの思惟や学問で考えられていた内容をより深く捉え直す」とによりおのれの思惟と学問とを峻別し、(ハイデガーノがおのれの思惟と見なしていた) 哲学を原学問とするような両者の曖昧な領域を明確に区分けするようになる。ハイデガーノの思惟と峻別された学問の課題を、個別的領域内における「知識の収集と秩序づけ」とする把握は、前期のものと同様である (Vgl. EM,36)。だが、ハイデガーノの中期の思惟においては、この「知識の収集と

「秩序づけ」の具体的な手続きが説明され、その意味が明瞭にされる。「知識の収集と秩序づけ」がなされるのは、当該学問の個別的領域内においてである。投企により個別的領域が与えられているときには、それと同時に、それに適した概念性・対象性が与えられ、そして学問的探求の進むべき軌道までもが、これらの概念性・対象性に拘束されるかたちで決定されてしまつていて。それゆえ、学問の課題である「知識の収集と秩序づけ」は、この軌道に沿つて前進する手続きとして考えられる。すなはち、個別的領域が投企された時点で、進むべき方向があらかじめ可能性として与えられており、そのあらかじめ与えられた方向へ実際に進むことによって、与えられた可能性を現実のものとして攝取同化するところとが「知識の収集と秩序づけ」なのである。ハイデガーノは、このよさなあり方をした学問の特徴として「経営」 (Betrieb) ・「実験」 (Experiment) を挙げてゐる。与えられた可能性を現実化するには、その手続きのための「技術化」・「組織化」 (GA13,18) が必要となる。その組織化された手続き、そしてそのための場として研究所が必要とされるという事態が、経営と名づけられてゐる (HW,81ff. Vgl. GI,12)。これは、可能性の現実化の過程が確定されているがゆえに可能になつてゐる。学問の「」一つの特徴である実験は、投企を通じて与えられ、「法則」として妥当している理論に事象が合致するかどうかを検証する手続きである (HW,79f)。実験では、法

則に合致する事象のみが真なるものとして採用され、合致しない事象は真ならざるものとして廃棄される。学問の特徴として挙げられる「経営」・「実験」のなす手続きはいずれも、投企によりすでに与えられている軌道・法則を前提している。そして、この手続きを通じて成果を確保していくことで、学問の個別的領域はおのれの存在意義を確認し、おのれの妥当領域の拡大を図る。それゆえハイデガーは、学問は「すでに開かれている真理領域の拡張である」(HW,48)と述べている。

このように、おのれを正当化し、おのれの妥当領域の拡大を図る学問は、その必然的な結果として、最終的には他の思惟の可能性を排除するにいたる。その中でもとくに数学的投企に基づいた学問（近代自然科学）は圧倒的な威力を誇り、その支配のもと、日常性は他の思惟の可能性を許容できないまでにいたっていると後期の思惟におけるハイデガーは考える (Vgl. GA9,76, FD,11,38, GI,25, SD,65)。つまり、「学問はもはや革新の試みとしては規定不可能」(SU,39)であるとハイデガーが考えるようになつたのは、おのれの拡大化を図る学問が日常性全体を覆うにいたり、もはや他の可能性の生ずる余地がなくなつたと判断されたからに他ならない。なるほど、それでも、学問の新領域が実際にいまだに産み出されてはいる。しかしそれは、各学問の領域内においてのことであり、もはや存在が問題にされるような（事象のあり方が投企されるような）根本的なもの

としては認められない (Vgl. SD,65)。このにおいてハイデガーは、「学問的・技術的世界」のみが許容されるなか、従来領域の存在論を確立してきた哲学はその終焉を迎えたと宣言する (SD,65, GA9,341 Ann.)。

しかし、ハイデガーは哲学の終焉を宣言しながらも、おのれの思惟の可能性まで放棄したわけではない。哲学の終焉後も「存在・現前性の内で統べているあけ開け (Lichtung)」(SD,74)が思惟の課題として残つていると主張される。このあけ開けは、「現前し脱現前するものすべて (alles An- und Abwesende)」に対して開かれているもの (SD,72)であるといわれる。ハイデガーレにとつて、「現前」⁽¹⁵⁾とは存在を、「現前しているもの」とは存在者を意味している。「現前しているもの」に対してのみ開かれているのであれば、それは学問であると考えられる。しかし学問は成果を産み出し、それを確保するものなので、「脱現前するもの (≠ 現前しないもの)」に対して開かれる」とはない。これと対比すると、ハイデガーの思惟とされる、「現前し脱現前するもの」に対して開かれる思惟は、なにかを産み出すにしても、それを確保することなく、消え去らしめさえするような思惟でなければならないであろう。そうすると、学問、そして従来の哲学把握（原学問としての哲学）においては、学問的成果としての存在者や新たな学問的領域を産み出す面のみが認められていたのに対して、そうして得られた成果・領域でさえ固

執することなく放置・放棄するような思惟、つまり、成果・領域から完全に逃れて可能性へ開かれ、しかも、おのれ自身が導いた可能性にさえ囚われることのないような思惟、もはや開かれるべき方向をも持たないような、完全に開かれた可能性に開かれる思惟をハイデガーは最終的におのれの思惟とするにいたつたと考えられよう。そしてそのような思惟においてこそ徹頭徹尾可能性に開かれる可能性、たとえば、圧倒的な仕方で日常性を支配する自然科学を前にしても、他の可能性への示唆をなしうる可能性が得られると考えられたのである。

最後に残された、「学問は思惟しない」という主張の意味だが、これは、ハイデガーが何を思惟として捉えたかを省みれば、もう多言を要しないであろう。「学問が思惟しない」とに関しては、「学問的領域の本質」に学問が「接近路を持たない」(WD,57)こと、「探求様式に従つてそれぞれの対象領域に開わりそのうちに定住する」(VA,133)、などとなどが挙げられている。要はこれは、学問が一定の領域の内部でのみ成立し、そこで採用される概念・探求方法などをすべてがあらかじめ決定されていふといふことを述べているにすぎない。⁽¹⁶⁾ハイデガーにとつては、制限された思惟、さらなる可能性が排除された思惟はもはや思惟の名に値しないのである。

おわりに

学問は本来、われわれの洞察を深めるべく一定の領域を切り開くものでありながら、その切り開かれた可能性を徹底化するあまり、逆に他の可能性を排除し、われわれの洞察を一面化する傾向を有する。これは、それにより得られる射程が長ければ長いほどそうである。現に、現代のわれわれは自然科学による以外の可能性を許容し得ないほどである。たとえば、太陽は核融合する太陽であり、天照大神ではない。正しいのは地動説であり、天動説ではない。このような事態に対して、他の可能性に対しても開かれた領域として持ち出されうるのが日常性である。もちろん、日常性においてもすでに一定の可能性が支配的であり、とくに現代においては、学問的認識の支配のもと、他の可能性が許容される余地はほとんどなくなつてゐるよう思われる。しかし、本来日常性はあらゆる可能性の基盤として、特定の可能性に固執しないもの、他の可能性を排除することのないものだつたはずである。日常性全体を覆うにいたるほど圧倒的な猛威をふるう学問的認識を可能性の一、つとして捉え、日常性を本来のあり方へともたらさうとする試み、さらなる可能性の受容を可能にしようとする試みは、現在の自然科学の普遍性を顧慮すると周囲の人間の嘲笑を買うだけのものにすぎないかもしれないが、われわれの思惟のあり方を一面的にしないた

めには必要な課題である。ハイデガーの試みは、可能性を開拓する——そのためにおのれ自身が乗り越えられた——でも——思惟自身が本来有していた能力を取り戻すべき哉みだつたのではないかと考えられる。

注

Vittorio Klostermann社のハイデガー全集 (Gesamtausgabe) からの引用箇所は、GAの後に巻数と頁数を()で記す。ハイデガーの他の本からの引用箇所は、以下の略号の後に頁数を()で記す。引用者による補足は()で、省略は…で表現する。

- BZ: *Der Begriff der Zeit*, Tübingen, 1989.
- EM: *Einführung in die Metaphysik*, Tübingen, 5., durchges. Aufl., 1987.
- FD: *Die Frage nach dem Ding zu Kants Lehre von den transzendentalen Grundsätzen*, Tübingen, 3., durchges. Aufl., 1987.
- Gl: *Gelassenheit*, Pfullingen, 3., Aufl., 1959.
- HW: *Holzwege*, Frankfurt am Main, 6., durchges. Aufl., 1980.
- ID: *Identität und Differenz*, Pfullingen, 1957.
- KM: *Kant und das Problem der Metaphysik*, Frankfurt am Main, 5., Aufl., 1991.
- SD: *Zur Stunde des Denkens*, Tübingen, 3., Aufl., 1988.
- SG: *Der Satz vom Grund*, Pfullingen, 3., Aufl., 1965.
- SU: *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität. Das Rektorat 1933/34*, Frankfurt am Main, 1983.
- SZ: *Sein und Zeit*, Tübingen, 16., Aufl., 1993.
- VA: *Vorläufe und Abgriffe*, Pfullingen, 1954.
- WD: *Was heißt Denken?*, Tübingen, 4., durchges. Aufl., 1984.
- (1) ドコスムトコベ、『形而上學』、田邊謙、岩波書店、岩波文庫、昭和11年発行、111頁。
- (2) ハイデガーのWissenschaftは日本語では「科学」も「藝術」も翻訳されつつある。また、日本語では「科學」と翻訳した方が適切な場合もあるが、術語の統一をせざるを得ぬため、自然「科学」と訳す以外は「學問」と翻訳するといふことである。
- (3) 一九五五年にばくらに明瞭に、「思惟には二種類あり、両者はそれぞれ仕方で正当であり必要である。それは、計算的思惟（＝近代学問）と省察的思惟である」(G113) と述べられるにいたる。ハイデガーによる学問批判が決して學問の否定ではないことは、晩年の思惟になればより

明確にハイデガー自身によって提べ直され。

(4) ハイデガーによる学問批判の考察をはじめに先立ち、一つ注意を促しておきたい。ハイデガーの学問批判はつねに一貫した視点からなされじこねが、この批判はハイデガーの生涯にわたって行なわれたものだけじ、思惟の深化、批判の重点の置き方などに応じて、使用される術語に関するでは揺れが認められる。ハイデガーの思惟の把握を最終的な目標とするわれわれは、この点を考慮して、個々の術語の変遷に拘泥するのではなく、このような思惟が批判され、どのような思惟の展開・堅持が意図されたのかじふへ延びられる議論を限定したい。

(5) 年代順に主要な箇所を列挙す。¹⁰ GA56,57,24,25,33, GA22,287, GA9,48, SZ,10,393, GA24,17, GA25,28,31,32,35,36, SU,13, HW,75, SD,64なども挙げられ。

(6) つまりハイデガーは、客觀化・理論化を伴う學問的発話と制限を被つたものとして考へているのである。(Vgl. GA9,358)。

(7) ハイデガーはつねに、真理の生起——學問・芸術作品、その他であれ——を漸次的なものではなく、突然的なものとして扱へる。この点に關しては次が詳しき。

Günther Figal, *Der Sinn des Verstehens*, Stuttgart, 1996, S.39.

Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke*, Bd.3, *Neue Philosophie I*, Hegel-Hessen Heidegger, Tübingen, 1987, S.261.

(8) 担當を原學問とする學問が、一九一九年の講義以来のものである。(Vgl. GA56,57,31)。

(9) ハイデガーはおのれの思惟を一貫して全体に關わるかのように据へる。GA9,2,103,118f.,198f.,241, GA15,295, GA22,2, GA26,199,202, GA29,307f.,13,35,36, GA56,57,26,33, GA59,188, FD,3, HW,205, ID,47, KM,8, SU,11,12などもその主要な例として挙がる。

(10) ハイデガーの思惟におこなは、理性・認識もしくは、気分の方が優れた開示能力を有しておこなわれる。(Vgl. SZ,136, HW,9)。次の論文の論述適切参考。

Rainer Thurner, „Gott und Ereignis——Heideggers Gegenparadigma zur Onto-

Theologie“, in: *Heideggers Studies* Vol.8, Berlin, 1992, S.81-102, bes. 85f.

(11) 一九二〇年代には、次のもので発言が散見される。

「しかし眞の哲学的知は……あいかじめ跳躍し新たな問題領域・問題観点を開く知である。…哲学的省察は、あい多る態度・決定に対しても新たな規範の軌道・尺度を準備す。」(GA13,18, Vgl. GA5,3)

「哲学は経験を開く」(GA65,37)

(12) 一九二三年の講義にになると、學問も伝統により覆われて、やがてやがて

られる。(Vgl. GA63,74f.)

(13) 「日常性」からハ語がはじめて術語化されたと思われる、一九一九／一〇年冬学期の講義において、「日常性」は「目立たない色合」へ並置され、確固たる被限定態に先立ち非表明的である面が強調されてくる(GA58,39)。

(14) 誤解を招きやすしが、ハイデガーが「実証的學問」・「実証主義」として名稱のものと考えているのは、たゞ、えりかゝるの思惟などではない。「言葉の本質的な單純さ」と立ち返る必然性」(GA15,351)を認めるハイデガーは、「実証的」(positiv) ところハ語はトトハ語ponere(贈へ)を読みとり、positum(置かれたもの)、いやに存在者を対象とする學問を總して「実証的」 と名づけよう。(Vgl. GA22,6ff., GA9,48,66f., GA24,17,460, EM,36, FD,72)。

(15) 存在はハイデガーの初期の思惟以来、「現前」(Anwesen)として捉えられたが、次第に「現前」は「脱現前」(Abwesen)の契機も併せ持たされようになる。とくに一九四一年の講義にねじこむ、學問の本質である技術は、その成果を可能な限り長期にわたって持続させよへとするが(GA51,17)、存在は本来、必ずしも恒常性を主張した現前ではなこと、ハイデガルが述べられてくる(GA51,112f.)。この把握が、哲学を越えたたりうる思惟を準備するものとなつてゐる。

(16) これに關して、ヴァイツゼッカーは次のようじこつてゐる。
「実証的學問、今日多用されているクーンの言葉における學問（科学）(science) は、それが、困惑させるような未解決の根本の問題を立てない、いふやう理屈で、問題のねじこむ安定した進歩を知つてゐる。これが、

ハイデガーが「時間は既往になつてゐるが、記憶は既往をしだらるべである」
(Carl Friedrich von Weizsäcker, *Wahrnehmung der Neuzeit*, München, Wien, 1985,
S.159.)

(なかはしまりん 大学院博士後期課程・哲学哲学史)